

籠谷直人・脇村孝平（編）.『帝国とアジア・ネットワーク——長期の19世紀』世界思想社
2009, iii+352p.

I 本書の位置

19世紀におけるアジア経済の姿が、いかなるものであったかについて、1980年代の日本から発信された経済史研究の議論は、明らかに画期的なものであった。

それ以前に描かれる19世紀のアジアとは、伝統から近代への過渡、封建制から資本主義への移行、植民地化と帝国主義への従属、ウェスタン・インパクトに対する受動性・他律性、これらにともなう断絶性などを軸に語られてきた。

しかし1980年代に入ると、アジア在来 of 交易システムや担い手などを例に、これらがウェスタン・インパクトを受けつつも、実際には、どのように地域経済を動かす力として作用してきたのかに着目し、アジア経済の自律性や連続性を主張する研究が登場する。一連の議論をリードした杉原薫、濱下武志、川勝平太など、日本の諸学者による提起は、世界中のアジア経済史研究に、それ以前とは異なる視角を提供した。それは後の1990年代に『大いなる逸脱』論（ボメラント）などにつながるなど、画期的なインパクトをもたらした。

しかし残念なことに、近年の日本からは、アジア経済の大きな姿についての革新的議論や大きな知見は、生み出されてこなかった。これは先行研究の議

論の大きさを乗り越えるにつき、評者のようなアジア経済史研究にたずさわる者の努力不足も否定はできないが、やはり1980年代の議論の成果が、いかに画期的であったかを示すものでもある。

こうした研究状況のなか、本書は「長期の19世紀」という課題を軸に、19世紀をはさんだアジアの広域市場秩序の形成を再検討したものである。それは19世紀のウェスタン・インパクトが、アジアにもたらしたものに留意しつつ、在来の帝国や商業ネットワークとの交錯について、長期の歴史的文脈のなかで多角的な考察・議論を試みた、ひとつの挑戦でもある。

II 本書の内容

本書の構成は、冒頭の総論に続き、第一部「帝国経済の変容」、第二部「自由貿易とネットワーク」、第三部「アジア間貿易の形成」から成り、合計11章を収録している。以下、各章の概要を見てみよう。

総論「19世紀アジアの市場秩序」（籠谷直人）では、課題設定についての解説、全体俯瞰を兼ねた総論が展開される。

第1章「帝国と互市——16-18世紀東アジアの通交」（岩井茂樹）は、明清統治下の中華帝国における朝貢と互市の歴史的展開に着目している。そして、18世紀には朝貢体制の理念から脱却し、官僚と商人の共通利害や、地域間の互酬関係に根ざす互市秩序が築きあげられたことが、19世紀の「自由貿易」を東シナ海・南シナ海に呼び寄せる足場となった可能性を指摘している。

第2章「閩南商人の転換——19世紀末、厦門におけるアヘン課税問題」（村上衛）は、厦門の輸入貿易に重要であったアヘンの課税問題を軸に、閩南商人の環境変化への対応を考察している。そこからは欧米商人、地方官僚、閩南商人、他地域商人が入り混じるなか、外国アヘン取引の衰退という変化に対し、閩南商人が新たな対応によって、20世紀前半に活動をつなげていった前提が明らかにされる。

第3章「18世紀後半のベンガルにおけるイギリス東インド会社の貨幣政策」（谷口謙次）は、1760～70年代の東インド会社で議論された貨幣改革の意義を論じている。そして、インド支配に必要な徴税

を進めるに必要な通貨システムを議論する際、イギリス的・ヨーロッパ的視座の限界が、18世紀初頭から続く現地銀貨の多様性や、ベンガル経済のもつある種の合理性について、不十分な理解や無視につながったことが明らかにされる。

第4章「『長期の19世紀』アジア——インド経済史を中心に」（協村孝平）は、1980年代以降の内外でのアジア経済史研究を整理し、19世紀の歴史像再考の必要性を、インド経済史のなかから探っている。そこでは自律的主体のインド人企業家、地域の人々の生活と経済を規定する生態的制約、といった内因に着目し、19世紀の経済発展を、「植民地主義」や「帝国主義」による収奪・搾取という外因から「大きな断絶」として捉えるのではなく、18世紀から第一次世界大戦頃まで続く連続性のなかで捉えようと試みている。

第5章「東アジアにおける自由貿易」（籠谷直人）は、清朝の「管理」貿易体制、オランダ東インド会社の「独占」などの後退過程と、19世紀イギリスの近代的帝国主義による自由貿易の浸透過程を検討している。この自由貿易原則は、領域支配の公式帝国ではなく、アヘン、自由貿易港、汽船と石炭燃料補給拠点、そして華僑ネットワークの相互補完関係から成る、東アジアでの影響圏を形成したとする。

第6章「19世紀末の朝鮮をめぐる中国人商業ネットワーク」（石川亮太）は、1880年代を中心に、朝鮮開港場での中国人社会の構成と、中国人商人の主導した対中国貿易を考察している。そこからは、当時の朝鮮の対中国貿易、そして担い手の中国商人のネットワークが、上海・仁川を中心とした開港場貿易への依拠と、黄海沿岸の広範囲で多角的に形成された在来型船交易の延長という、二側面をもっていたことが明らかになる。

第7章「『つなぐと儲かる』——広東華僑ネットワークの慈善とビジネス」（帆刈浩之）は、清末の広東・香港や海外華僑社会での境界を越えた慈善活動に着目し、これをビジネスも含めた華僑ネットワーク全体の秩序問題として考察している。そこからは広東華僑の遺体送還システムが、ネットワークを拡大化・円滑化する上での移民の心理的負担軽減、言い換えれば移動促進のための安全提供を、世代を超えた血縁系譜の連続性と、地縁をベースとした相互

扶助のネットワークのなかで実践したものであったことが明らかとなる。

第8章「環ベンガル湾塩交易ネットワークと市場変容——1780-1840」(神田さやこ)は、1780～1840年代の東インド会社による塩独占体制下、東部インド塩市場の構造と地域経済の変容を考察している。そこからは18世紀後半の経済再編が、1820～30年代には東インド会社の商取引・市場統制における脆弱性を表面化させ、自由貿易体制への再編が進行することで、「長期の18世紀」に終焉がもたらされていた可能性を示す。

第9章「19世紀前半のアジア交易圏——統計的考察」(杉原薫)は、19世紀前半のアジア間貿易の規模と構造を、イギリス議会資料やそのほか関連文献から得られる貿易・交易統計から概観している。そして、1840年頃のアジア間貿易が、欧米との遠隔地貿易規模に匹敵しただけでなく拡大傾向にあった事実は、重商主義から「強制された自由貿易」へのレゾーム転換が、さまざまな商人の貿易機会を増やした結果であるとする。それはウェスタン・インパクトそのものでなく、これに対するアジアのリスポンスの結果であり、世界貿易の真の担い手が誰であったかについて、根本的再考を促すものであるとする。

第10章「20世紀初頭における香港の銀本位制」(西村雄志)は、香港の銀本位制を考察し、その位置を考察している。そして19世紀末から20世紀初頭、世界的には国際金本位制が浸透するなか、香港の通貨制度は、中国と同様に秤量貨幣の性格を有した各種銀貨流通を確保する銀本位制と、ポンド価値と同一視できる紙幣を市中商取引に浸透させる金為替本位制の機能を兼ね備えることで、アジアでの特色ある中継的地位を維持したとする。

第11章「イギリス帝国下のイースタン・バンク問題——英領インドから海峡植民地へ(1853-67年)」(川村朋貴)は、アジア貿易金融専門のイギリス系諸銀行に着目し、その英領インドと海峡植民地への進出を描いている。これらの銀行は、本国の大蔵省やインド省の間接支援は得たが、英領インドでの活動は困難に直面した結果、海峡植民地に進出する。それは、英領インドの付属物であった海峡植民地が、本国直轄植民地となり、「東南アジア」が一つ

の市場として開かれるという、帝国の再編過程で実現したものであったとする。

III 本書の評価

幅広い専門領域による共同研究成果としての本書について、各章各論の是非・評価を論じるには、残念ながら紙面制約と評者の能力不足がある。したがって、ここでは本書全体について、その評価を記したい。

まず本書で評価されるべきは、「長期の19世紀」という課題設定が、各参加者にしっかりと共有され、これに沿った形で、各々の専門領域や関心にもとづく論考が展開されている点である。無論、すべての収録論文が、研究上の新鮮な視覚や知見を見せてくれたとは評価しがたい。しかしそれ以前に、一般的な編集書では、興味深い課題設定にもかかわらず、各論ではうまく共有されず、章間の非関連性が見られることも多い。

本書では、こうした問題はほとんど見受けられず、むしろ「長期の19世紀」という課題設定を活かす形で、南アジアから北東アジアに至る幅広い地理的範囲と内容をカバーしながら、一つの書物として完結している。これによって本書は、従来、19世紀アジア経済の姿を議論するに際して必要とされてきた、具体的事象についての詳細な研究成果を、全体での課題設定を確実に共有しながら提供している。

また本書の課題設定と研究成果は、編者の脇村氏が記すように、20世紀末から21世紀初頭に発生した世界経済の変容を読み解く上でも、有益な意義をもつ。従来の19世紀理解の延長線上にある20世紀理解では、その本質を明らかにすることができず、むしろ真の理解は「長期の19世紀」のあり方を再考する上で成り立つのであるとすれば、本書の成果は、世界史上での19世紀の意義を考える上で、重要な示唆を提供している。

しかし同時に、本書に感じた最大の不満は、結局のところ「長期の19世紀」とは何であったのか、という総体的かつ深化した議論や位置づけが欠落している点にある。その18世紀から20世紀に通底する連続性や変容とは、はたして何であったのかについては、全体の成果を俯瞰した上でも、また総論やま

とめでも、ひとつのモデルに昇華するまでの、十分詳細な議論が尽くされたとは言いがたいと感じた。この部分が、より深化した形で提示されていれば、本書の完成度はより高まったのではなかろうか。

またいまひとつ気になるのは、タイトルをふくめて、全体的に「ネットワーク」という言葉が多用される点である。もちろんその言葉自体が、何を指そうとしているのかは、評者も理解できる。しかし、それが意味するところの本質については、明確な議論がなされないまま、暗黙の合意のなかで多用されているのではなかろうか。1980年代から「便利」に使われてきたこの言葉の本質を捉えることは、当時提起された諸説を乗り越え、アジア経済史をより深化した形で理解する上で、必須の関門であると考ええる。

以上、本書の評価を述べてきた。結論から言えば、本書は「長期の19世紀」を経済史的側面から多角的に検証し、従来求められてきた議論の深化に貢献するものである。また編集書としては、高い完成度をもっている。これは脇村氏が、「常に議論をリードしたのは、籠谷の『帝国とネットワーク』というアイデアであり、彼の情熱であった」記すように、もう一人の編者である籠谷氏の努力の結晶である。またそれは同時に、中堅・若手を中心とした研究者たちが出した、先行研究を乗り越えんとする営為の、ひとつの結晶なのではなかろうか。この分野に少しでも関連のある方には、ぜひ一読をおすすめしたい。

(久末亮一・政策研究大学院大学)